

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	渡邊 登紀
論文題目	陶淵明と「田園」 ―型・時間・地域―		
（論文内容の要旨） 「序」において、申請者は本論文が構想されるに至った経緯を明らかにしている。申請者は、これまでの六朝文学研究が黄河流域から移ってきた貴族層による詩賦を“主流”のジャンルとし、土着士人層の文学や詩賦以外のジャンルを“非主流”として軽視してきたことを批判する。また陶淵明研究については、同時代においては“非主流”であった彼の文学が唐代以降現代に至るまで“主流”と評価されるようになったために、却って陶淵明文学の同時代における異質性が閑却されてしまっていると問題点を指摘する。本論文はこのような問題意識から出発し、陶淵明が長江流域土着の士人であるという出自に着目し、彼の文学の根底には、黄河流域文明とは異なるこの地の文化の受容があるとする仮説を証明しようとする。 論文は、「「田園」という拠点」と題された第一部と「「田園」の境域」と題される第二部に分かれる。申請者によれば、「田園」は陶淵明によって文学的に発見され、陶淵明が文学史において“主流”と見なされるようになって、「田園」もまた文学的地位を確立した。第一章「「田園」と時間―「帰去来兮辞」論」。「帰去来兮辞」は、陶淵明が「田園」に帰ることを宣言した作品で、彼の代表作とされる。この章では、まず、陶淵明以前における「田園」という用語の使用について調査が行われ、さらに陶淵明が参考にしたと考えられる張衡「帰田賦」が、一種の隠逸の楽しみを述べる点で、陶淵明の「田園」と異なる世界であると論じられる。これらの考察によって、「田園」が陶淵明以前、詩語ではなく、文学的感興を呼ぶ空間でもなかったことが明らかになり、「田園」が陶淵明によって発見された詩語であったことが論証される。続いて「帰去来兮辞」の換韻を手がかりに陶淵明がこの作品で描き出そうとした世界を精密に再現する。さらにこの作品の序を分析することにより、この作品が、「隠者を詠う文学」ではなく、「隠者が詠う文学」であったと結論づける。 第二章「陶淵明のトポス―「桃花源」と「田園」」は、「帰去来兮辞」とともに陶淵明の代表作とされる「桃花源記」を考察する。この論考では「田園」と「桃花源」を同一視しようとする従来の研究を批判する。申請者は「桃花源記」「帰去来兮辞」ともに現れる舟を手がかりに、両作品はどちらも戻るべき本拠を「田園」の世界とするが、「帰去来兮辞」が舟によって「田園」に流れる＜不可逆的時間＞と＜永遠の時間＞を象徴するのに対し、「桃花源記」では舟は「田園」と「異域」の間をつなぐものであると論じ、従来指摘されるように、「桃花源」と「田園」はともに＜官＞に対置する意味を持つものの、陶淵明にとって両者は同一でもなく重複もしない、全く異なる空間であることを論証する。以			

上二章によって、「田園」は陶淵明の現実の生活の場であるとともに、彼の「田園」は、理想郷ではなく現実の生活の場であったことが明らかにされた。

第三章から、第二部に入る。第三章「湛方生と＜官＞の文学―湛方生と東晋末の文学活動一」、第四章「＜私＞の文学への出発―湛方生と東晋末の文学活動二」は、陶淵明の同時代人と考えられる湛方生の作品を検討することによって、陶淵明の時代の文学状況を探ろうとする。第三章は、湛方生の作品が、公的作品と個人の感懷を表白する作品に分かれ、特に後者には一貫して「羈客の情」が見られることを指摘する。ここにおいて彼の文学には＜公＞と＜私＞に支えられる＜私＞という二層構造があったことが指摘された。続いて第四章では、もっぱら湛方生の＜私＞文学が分析される。そこに文体の型の束縛を破ろうとする志向がみられること、また陶淵明の「田園」と同じような「園」が描かれていることに申請者は注目し、陶淵明が描いたような「田園」生活への憧憬が、この時期少なくとも一部の士人間に共有されていたのではないかと論を進める。但し、湛方生にとって、「園」「丘園」は生活の場ではなく、あくまでも憧憬の場であったことも論証される。これらの考察を通して、陶淵明の描いた「田園」は、他者には実現させることが容易な空間ではなかったと結論づけられる。

最終第五章「二つの「龐参軍に答うる詩」」は、龐参軍なる＜官＞にある人物に対して陶淵明が送った二種類の詩から、「田園」を取り巻いていた社会と陶淵明との関わりを探る。申請者は、二種類の詩のうち四言詩は対面の場で、もう一種類の五言詩は手紙として作られたとする。そして両編の分析を通して、出仕を勧める龐参軍に対して、「田園」を離れないという陶淵明の強い意思を読み取っている。

以上の論考を通して、申請者は、文学の“型”、作品に示される“時間”、作品創作の場即ち「田園」及び長江流域という“地域”、陶淵明文学は彼がそれらを強く意識することによって生まれたのであり、それらが彼の文学が既存のそして同時代の文学を超える独自の文学を創作し得た理由であると結論づけている。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、「田園」という言葉に注目して陶淵明の文学を解明しようとした意欲的な論文である。中国文学において陶淵明は重要な詩人の一人であるが、陶淵明の在世中、さらには六朝時代を通じての陶淵明評価と、唐代以降の評価は全く異なる。申請者はこの評価のねじれのため、同時代における陶淵明の異質性が十分に解明されていないと問題提起し、本論文を構想した。

申請者は、陶淵明の文学が、詩賦以外の文学の“型”(ジャンル)でも創作を行ったこと、自分が生きる“時間”、或いは流動する時間を作品に盛り込んでいること、また長江流域土着(“地域”)の士人としての意識が基底にあることを理由に、彼を同時代における“非主流”の文学者と定義する。そして申請者が陶淵明の異質性の論証の為に注目したのが、代表作「帰去来兮辞」に現れる「田園」という言葉であった。

陶淵明文学に対する考察は、豊富な蓄積をもち、彼の「田園」も以前より注目されてきた言葉である。しかし申請者は、新しい視座から陶淵明の「田園」を考察している。また、陶淵明の作品や文献資料に対する極めて緻密な調査に基づいて各章の論考が展開されており、論文を通して申請者の力量を十分に窺うことができる。以下、本論文が学界に果たしうると考えられる意義について、評価とともに述べる。

まず、問題設定の独自性を指摘しなければならない。陶淵明文学の異質性は、これまでも指摘されたことがあった。しかしその異質性の来源を出自に、そして異質性が文学ジャンルと時間表現に示されているという問題設定は、従来にない斬新な着想である。さらに、「帰去来兮辞」と「桃花源記」を取り上げて彼の文学ジャンルと時間表現の特異性を考究しているが、この二作品は、陶淵明の代表作とされ、先行研究が多いなかで、独自の視点の設定に成功している。

また、本論文は、陶淵明の「田園」という言葉をキーワードとし、一貫してこの言葉が内包する意味や空間について考察を加えている。陶淵明の「田園」については、正に汗牛充棟と称しうるほど先行研究がある。しかし申請者は、陶淵明以前の「田園」の用例やその意味を綿密に調査するとともに、六朝時代までその調査の範囲を広げ、そのうえで陶淵明によって「田園」が詩語として成立したことを論証した。申請者は「田園」という言葉が『文選』には「帰去来兮辞」の一例しかないことを指摘しているが、このさりげない指摘は、上記のような緻密な資料調査と、先行研究を十分に咀嚼することによって、申請者によって発見された事実である。申請者によって陶淵明文学に対する新しい研究視座が確立されたと評することができる。

申請者は、従来指摘されていた問題について、新しい問題設定と視座からより深く陶淵明文学を解明したばかりでなく、従来看過されてきた問題についても、新たな考察を行っている。特に論文第二部「「田園」の境域」の三論考は、陶淵明の異質性が「田園」に集約されているとするならば、そこを取り巻く状況はどのようなものであったかを論

じている。従来対立する世界として顔延之や謝靈運の文学が取り上げられることが多かったが、この考察は、陶淵明の文学と生活の拠点としての「田園」を軸に、その周縁に対して照明を当てようとしたものであり、陶淵明の「田園」が内包する意味をより明確にしたばかりではなく、同時代における陶淵明文学の位置を明らかにしようとしている。これは従来の研究に欠けていた考察と言える。

このように、幾つかの新しい重要な指摘と論証が行われている一方で、時に飛躍と感じられる部分もあった。たとえば第二章において「田園」と「桃花源」はともに<官>に対置する空間であるが、同一の空間でも重複する空間でもないという結論は、納得できるものであるが、申請者が舟を時間や領域の広がりを示す象徴とすることについては、やや説得力に欠け、他の文学作品などを用いてより広い視野からの論証が必要であると感じられた。また第三章第四章で湛方生を陶淵明の同時代の“非主流”文学の一例として取り上げている。申請者は、湛方生の作品に<公>と<私>の二種類があることを主張する。また湛方生の作品に見える「羈旅の情」や風の描写が陶淵明と類似していることなどから陶淵明と同じ“非主流”文学の存在と見なしている。資料的限界があるにせよ、その作品を時代状況に引き寄せて解釈しすぎているよう感じられること、また“主流”文学との比較検討など、更なる調査と丁寧な論証が求められる。第五章の龐參軍詩に対する考察は、従来あまり注目されてこなかった作品に着目した意欲的な論文であり、論旨は説得力を持つが、四言と五言という詩型や連作という形式に対する論述部分は、“非主流”“主流”という論文の骨子となる“型”を守ることが優先され、残念ながら反論の余地を残す。

本論文は、陶淵明の文学について、これまで自明のこととされていたが、実は解明されていない問題が多々あることを明らかにした。さらなる展開を必要とする部分はあるものの、陶淵明研究の新たな方向を示したことは間違いない。よって本論文は、博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成24年6月22日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降